

伊勢物語の「翁」と「みやび」

大井田 晴彦

はじめに

初段の初冠に始まり、第二百二十五段の辞世の和歌に至るまで、『伊勢物語』は、主人公の人生のさまざまな出来事を語って余すところがない。輝かしい青春の日々から、次第に老いの陰が忍び寄り、やがて男は戸惑いのうちに死を迎えることとなる。老いの孤独、憂愁を語る段は少なくないが、特に注意されるのは主人公を「(右の馬頭の)翁」と称する一連の章段群である。この呼称には、単なる老人にはとどまらぬ、特別な意味が込められている。すでに多くの指摘が備わるように、^{〔1〕}晴れの場で寿ぎの和歌を献するのが翁の役割であり、史上実在の人物が実名で登場する段で活躍するのが特徴である。本稿では、「みやび」の担い手としての「翁」について、関連章段を取り上げながら論じたい。

一

『伊勢物語』の「翁(翁さぶ、かたみ翁を含む)」の用例は、九

伊勢物語の「翁」と「みやび」(大井田)

例、具体的には、四十・七十六・七十七・七十九・八十一(二例)・八十三・九十七・百十四の各章段に見られる。また、「翁」の語は見えなくとも前後の関係から、主人公を「翁」として語る段も見られる。後半部に偏って集中しているのも特徴的である。『伊勢物語』の各章段は、必ずしも年代記的配列をとってはいないが、やはり後半部に男の後半生を語る段が多いことがうかがえる。

昔、二条の後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神に詣でたまひけるに、近衛府にさぶらひける翁、人々の祿たまはるついでに、御車よりたまはりて、詠みてたてまつりける、
とて、心にもかなしとや思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし。
(七十六段)

二条后関連章段は、若々しく一途な青年時代の恋とその挫折を語る段が多い。本段は「翁」となった男が過去の青春の日々を懐古するという話で、一連の章段の結びといった性格を持つ。「翁」は、ここでも晴れの場に登場して寿ぎの歌を献ずる役割を担う。

男の歌の眼目は「神代のこと」にある。藤原氏の祖アメノコヤネ

ノミコトは、ニギノミコトの天孫降臨に随った。以来、神話の時代から、藤原氏は皇室と強く結ばれて繁栄してきた。その原点たる天孫降臨に立ち戻って、一族のますますの栄花を祈願する、祝意に満ちた歌である。しかし、男の意図は別のところにある。すなわち、「神代のこと」とは、高子との、甘くも切なかつた過去の日々をも意味している。翁と後の間だけに通ずる恋の符丁である。参詣に供奉した人々は、表の意味だけを理解しているに過ぎない。盛儀の喧噪の中、密かに二人だけが心を通わせている。なお、『大和物語』百六十一段は、『伊勢』三段と組み合わせ成り立したのだが、「在中将」とあり、「翁」とは語られていない。昔、春宮の女御の御方の花の賀に、召し預けられたりけるに、

花に飽かぬ嘆きはいつもせしかども今日の今宵に似る時はなし (二十九段)

同じく二条后章段の一つである本段は、「翁」の語こそ見えないものの、男はさほど若くはなく、老齢に達していると目される。すでに入内し春宮の母となった高子との接点は、この「花の賀」のような晴れがましい公の儀式にしかあるまい。男を「召し預け」、奉仕させたのも、高子の特別の配慮、拔擢と想像される。男の歌は、花の見事さを賞美することで賀を寿ぐものであるが、同時に「花」に主催者の女御をたとえ、称賛している。その一方で、今もなお諦めがたい高子への想いをにじませた歌である。賀

宴の場を寿ぐ慶祝の歌でありながら、私的な恋情を潜ませてもいる。七十六段とよく似た段といえよう。

二

七十七段は、これに続く七十八段とともに、藤原多賀幾子の法要を話題とする。多賀幾子は文徳女御、父は良相、兄がこの段にも登場する常行である。

昔、田村の帝と申す帝おはしましけり。その時の女御、多賀幾子と申す、みまそかりけり。それ失せたまひて、安祥寺にて、みわざしけり。人々、捧げ物たてまつりけり。たてまつり集めたる物、千捧げばかりあり。そこばくの捧げ物を、木の枝につけて、堂の前に立てたれば、山もさらに堂の前に動き出でたるやうになむ見えける。それを、右大将にいまそかりける藤原の常行と申すいまそかりて、講の終はるほどに、歌詠む人々を召し集めて、今日のみわざを題にて、春の心ばへある歌、たてまつらせたまふ。右の馬の頭なりける翁、目は違ひながら、詠みける、

山のみな移りて今日にあふことは春の別れをとふとなるべし

と詠みたりけるを、いま見ればよくもあらざりけり。そのかみは、これやまさりけむ、あはれがりけり。 (七十七段)

多賀幾子の死は、天安二年(八五八)十一月十四日のこと。この法要が四十九日のそれとすれば、貞観元年(八五九)正月二日のこととなる。なお、常行が右大将に、業平が右馬頭に任じられたのは、それぞれ貞観八年、同七年であり、法要よりかなり後年のことになる。多くの捧げ物に溢れた盛大な法要のさまを題に、「右の馬の頭なりける翁」が歌を献じた。「山のみな移りて」は、釈迦入滅の際に、「大地諸山大海、皆震動」したという『大般涅槃経』を踏まえる。「春の別れ」は女御との別れの法事が春に行われたことをいう。さらに二月十五日の釈迦入滅を重ね合わせる。山がそっくりすべて移って今日のこの法要に立ち会うのは、過ぎ去ってゆく春の別れを見送るつもりなのだろう、といった歌意である。山を擬人化する技法は、七十六段の「大原や小塩の山もく」に通ずるものがある。神事と仏事、慶祝と哀悼と、七十六段と七十七段は、きわめて対称的な構図を示している。「山のみな移りて」とは機知に富む、というよりは奇抜な詠みぶりだが、それは「目は違ひながら」という老耄の卑下、韜晦に支えられているのである。「いま見ればく」以下の語り手の評言は、余りにも大げさで誇張した歌で、法事の場合を離れてみると、かえって興趣が少なく、という批判であろう。

貞観十七年二月十七日に常行が薨去した際、朝廷は業平を使者として従二位を追贈した(三代実録)。察するに、二人は上司と部下の関係だったのだろうか。いずれにせよ親密な間柄であった

ことは想像に難くない。

この段を理解するには、当時の史実をpushさせておく必要がある。⁽²⁾多賀幾子の死に先立つ十一月七日には、清和天皇が即位、良相の兄良房は摂政に、その娘明子は皇太夫人に任じられている。繁栄を謳歌する良房一門と、多賀幾子の死の悲しみに沈む良相一門の明暗が際立つ。かくして衰運にある良相の家に、「右の馬の頭なりける翁」が親しく出入りし、奉仕している点が注意される。以下にも見るように、時流から外れた名門に心を寄せ、喜びや悲しみを分かち合うのが、『伊勢物語』の主人公の美質であり「みやび」とも称すべきものであるが、それは本段にもうかがえる。

七十八段もまた、多賀幾子の法要を語る段であるが、亡き女御を哀惜した前段とはやや趣を異にし、常行と山科の禪師の親王の風流の交わり、それを媒介し盛り立てる主人公を描くことに主眼があるようである。本段では、主人公は「右の馬の頭」とのみ称されるが、前段を承けて「翁」として語られていると見てよいだろう。

昔、多賀幾子と申す女御おはしましけり。うせたまひて、七七日のみわざ、安祥寺にてしけり。右大将藤原の常行といふ人いまそかりけり。そのみわざに詣でたまひて、かへさに、山科の禪師の親王おはします、その山科の宮に、滝落と、水走らせなどして、おもしろく造られたるに、詣でたま

うて、「年ごろ、よそには仕うまつれど、近くはいまだ仕うまつらず。今宵は、ここにさぶらはむ」と申したまふ。親王、喜びたまうて、夜のおましのまうけさせたまふ。さるに、この大将、出でて、たばかりたまふやう、「宮仕への始めに、ただなほやはあるべき。三条のおほみゆきせし時、紀の国の千里の浜にありける、いとおもしろき石たてまつれりき。おほみゆきの後、たてまつれりしかば、ある人の御曹司の前の溝に据ゑたりしを、鳥好みたまふ君なり、この石をたてまつらむ」とのたまひて、御隨身、舎人して、取りにつかはす。いくばくもなく、持て来ぬ。この石、聞きしよりは、見るはまされり。「これを、ただにたてまつらば、すぐるなるべし」とて、人々に歌詠ませたまふ。右の馬の頭なりける人のをなむ、青き苔をきざみて、蒔絵のかたに、この歌をつけて、たてまつりける、

飽かねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ

となむ詠めりける。

(七十八段)

「山科の禪師の親王」は、仁明天皇第四皇子、人康親王（法名は法性）をさすとするのが通説である。なお、その出家は貞観元年五月七日のことで、多賀幾子の死後になり、本章段の記述も史実とやや食い違う。常行は、風流な親王の人柄をかねてから慕っていたらしい。女御の法要を契機に、二人が親交を結ぶ。風流を凝

らした山科の宮に、常行は趣ある石を献上しようとする。ちなみに紀伊国は良質の石の産地として知られていた。「紀の国のしららの浜にひろふてふこの石こそはいはほともなれ」（紫式部日記）、「熊野道に千里の浜といふ所にて、（花山院ハ）御心地そこなはせたまへれば、浜づらに石のあるを御枕にて」（大鏡・伊弉伝）などがある。「これを、ただにたてまつらば、すぐるなるべし」ということで、男が歌を奉った。充分ではありませんが、この岩に私のあなた様への思いを託して献上いたします、色には見えない真心を示すべがないので、という歌意である。常行に代わって詠歌したのである。「おもしろき石」に「青き苔をきざみて、蒔絵のかたに」という趣向は、「わが君は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔のむすまで」（古今集・賀・三四三・詠み人知らず）の歌に通ずる発想であり、盤石な石に、親王の永遠の繁栄をたとえ、寿ぐのである。

庭園の石について、『作庭記』に、次のような記述が見える。⁽³⁾

「山水をなして、石を立つる事は、深き心あるべし。(略) 山をもて帝王とし、水をもて臣下とし、石をもて補佐の臣とす。(略) 山弱しといふは、支えたる石のなき所なり。帝弱しといふは、補佐の臣なき時なり。かるがゆゑに、山は石によりて全く、帝は臣によりて保つと云へり。このゆゑに山水をなしては、必ず石を立つべきとぞ」。常行が石を献上した背景には、かかる思想がある。石に託して主の親王への恭順と忠誠心を表明したのである。

かくして翁の歌を介して、親王と常行は強韌な絆で結ばれたことになる。

禅師の宮邸の風流は、次に取り上げる源融の河原院のそれにも似ている。主人公の男は、こうした「みやび」の場に登場し、その歌の力によって、「みやび」をますます活性化してゆくのである。

三

八十一段に語られる、左大臣源融の河原院の風流は、とりわけ有名であつたらしい。⁽⁴⁾ その栄枯盛衰のさまが、多くの説話集にも語られている（江談抄・三・三二一、今昔物語集・卷二四・第四六、同・二七・第二、宇治拾遺物語・一五一、古本説話集・上・二七、古事談・一・七など）。

昔、左のおほいまうちぎみいまそかりけり。賀茂河のほとりに、六条わたりに、家をいとおもしろく造りて、住みたまひけり。神無月のつごもりがた、菊の花うつろひ盛りなるに、紅葉のちぐさに見ゆる折、親王たちおはしませて、一夜、酒飲みし遊びて、夜明けもてゆくほどに、この殿のおもしろきをほむる歌詠む。そこにありけるかたみ翁、板敷の下に這ひ歩いて、人に皆詠ませ果てて、詠める、

塩竈にいつか来にけむ朝風に釣りする舟はここに寄らなむ

伊勢物語の「翁」と「みやび」（大井田）

となむ詠みけるは、みちのくににいきたりけるに、あやしくおもしろき所々多かりけり。わがみかど六十余国の中に、塩竈といふ所に似たる所なかりけり。さればなむ、かの翁、さらにはここをめでて、「塩竈にいつか来にけむ」と詠めりける。
(八十一段)

この文章では必ずしも判然としないが、『今昔』卷二十七・第二に「陸奥ノ国ノ塩竈ノ形ヲ造テ、潮ノ水ヲ汲入テ池ニ湛ヘタリケリ」とあるように、当時、日本で最も風光明媚の地とされた陸奥の塩竈をそっくり再現したのが、河原院だったのである。融は、莫大な財力を投じて営んだ豪邸に、親王たちを招いて詩歌管絃に興ずる。

融の主権する河原院の文芸サロンに出入りする人々の中には、業平の兄行平もいた。二人の交流は、『後撰集』雑一（一〇八一〜一〇八二）の贈答によつて知られる。

家に、行平朝臣まうで来たたりけるに、月のおもしろかりけるに、酒らなどたうべて、まかり立ちむとしけるほどに

河原左大臣

照る月をまさ木の綱によりかけて飽かず別るる人をつながむ
返し
行平朝臣

限りなき思ひの綱のなくはこそまさ木のかづらよりも悩まめ
当然、業平もまた河原院サロンの主要メンバーの一人であったは

ずである。

融がかような豪邸を営んだ背景には、帝位に即けなかった挫折感や失意によるところが大きい。嵯峨天皇の皇子である融は、陽成廃立後、即位への意欲を示すが、時康親王（光孝天皇）を擁立する基経に退けられる（古事談・巻一・五）。皇位継承から排除されたことで、膨大な財力を費やした豪邸の造営、そこでの詩歌管弦や宴に明け暮れる、脱俗的な風流へと向かう。政治の世界での苦い敗北が、文化面での優位の誇示へと彼を向かわせたのである。門を閉ざして世俗と交わりを断ち、精神の自由を楽しむことを「閑」という。まさに融のふるまいは、「閑」の実践であった。行平をはじめとして、河原院に集う人々もまた、閉塞した世の中——具体的には良房・基経らが専横を極める世の中——にあつて不満を抱いている者たちであろう。

「この殿のおもしろきをほむる歌」を集まった人々が詠む。「この殿は むべも むべも富みけり 三枝の あはれ 三枝の はれ 三枝の 三つば四つばの中に 殿づくりせや 殿作りせや」（催馬楽・此の殿）なども歌われたのだろう。

邸を称賛する歌を詠み終えた頃、主人公の「かたる翁」が現れ、結びの寿ぎの歌を奉る。単なる翁ではなく、ことさらに「かたる翁」と呼ばれている点に注意されよう。神仏などの聖なる存在が、卑賤の者の姿を借りて現れることが、しばしばある。『日本霊異記』上巻・第四には、片岡の路傍で苦しんでいた「かた

る」を聖徳太子が哀れみ、衣を与えたが、実はその「かたる」の正体は仏菩薩であったという説話が見える。「翁」よりも、さらに強い歌の呪力を有する、靈妙な存在が「かたる翁」といえよう。

翁の歌は、塩竈にいつやつて来たのだろうか、朝凧に釣りする舟は、この美しい海岸に立ち寄ってほしい、くらしい意。実際に塩竈に足を踏み入れ、海を望み見るかのように歌っている。「塩竈にいつか来にけむ」という、とぼけた詠みぶりも、いかにも翁らしい。「みちのくににいきたりけるに、あやしくおもしろき所々多かりけり」とあるように、若き日の東下りの感慨を振り返りつつ、詠歌するのである。「朝凧」のうらかな海岸の叙景には、偉大な王者の徳が広く及んだ理想の空間とする、政教的な思想もうかがえる。また、「釣りする舟はここに寄らなむ」の表現にも注意したい。岸へと寄る舟とは、王の徳を慕って集まる人々をも喩えていよう。類想の例として『文華秀麗集』巻上「江樓の春望」（小野岑守）を掲げよう。⁽⁵⁾

春雨濛濛にして江樓暗く

悠悠なる雲樹尽くに微茫なり

橋頭孤つ立つ一竿の柱

湖口競入る千許の檣

麦壘の新色荒村の緑

楓林の初葉釣家の香

滔滔なる流水何にか似たる

四海朝宗聖王に帰る

これは淀川流域の実景を詠んだものではない。帝徳の及んだ観念的・理想的な風景が現前している。傍線部は、滔滔と豊かに流れる江水は何に似ているか、四方の諸侯が天子の徳を慕い、集まり来て帰順するかのようだ、の意。『詩経』小雅「沔水」の「沔たる彼の流水は 海に朝宗す」による。『凌雲集』「山崎より江に乗りて讃岐に赴く、難波の江口に在りて懐を述べ、野二郎に贈る」(林娑婆)に「流に泛かびて梶棹を催し 海を指して朝宗を共にす」とあるのも同様である。翁の詠歌は、こうした発想によりつつ、河原院の主人融を、この世を統治する帝王のごとく讃えているのである。「わがみかど六十余国」という聞き慣れぬ表現も、融帝が、日本全土を広く掌握しているかのような印象を与える。さて、『伊勢物語』の成立に融の関与を重視する説がある。確かに、一連の東下り章段などは、河原院との関連が深そうでもある。河原院を陸奥の地に見立て、旅する心持ちになつての歌語りが行われた、それが物語に取り込まれた、という想像は的外れではあるまい。初段に「陸奥のしのぶもぢずり誰ゆるゑに乱れそめにし我ならなくに」(古今集・恋四・七二四では第四句「乱れむと思ふ」)の融の名歌が引かれていたのも、『伊勢物語』との関わり
の深さを感じさせる。

四

八十一段に続く、八十二・八十三・八十五の三章段では、不遇の親王惟喬と、主人公のうるわしい主従の絆が語られている。親王は、文徳天皇第一皇子、父帝の鍾愛は深いものがあつた。しかし生母が紀氏である惟喬が立坊する可能性はもとよりなく、良房の娘、明子の生んだ惟仁親王(後の清和天皇)が、生後八ヶ月で立太子するという異例の事件が生じた。世の人々が、良房の横暴に憤懣を抱き、不遇の惟喬に同情を寄せたことは想像に難くない。藤氏を諷刺する「大枝を越えて走り越えてわが護る田にや掬りあさむ鳴や雄々い鳴や」(三代実録・清和即位前紀)という童謡も流行した。後代には、競馬や相撲の優劣で、立坊を決めるという荒唐無稽な説話も生まれた(平家物語・巻八・名虎、曾我物語・巻一)。融と同じく、惟喬親王もまた、権勢を拡充してゆく良房・基経により表舞台から排除された悲運の皇子であつた。物語の章段配列の意図は明らかであろう。

親王が紀有常の妹、静子(三条町)を母とする縁から、業平は近侍することになる。それに加え、親王の人柄と不遇に対する思
いとが、業平を惟喬へと接近せしめたのである。

昔、水無瀬に通ひたまひし惟喬の親王、例の狩しにおはします供に、馬の頭なる翁仕うまつれり。日ごろ経て、宮に帰
りたまうけり。御送りして、とくいなむと思ふに、大御酒た

まひ、禄たまはむとて、つかはさざりけり。この馬の頭、心もとながりて、

枕とて草ひき結ぶこともせじ秋の夜とだに頼まれなくにと詠みける。時は、三月のつごもりなりけり。親王、おほのごもらで、明かしたまうてけり。

かくしつづ、まうで仕うまつりけるを、思ひのほかに、御ぐし下ろしたまうてけり。正月に、拝みたてまつらむとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室にまうでて、拝みたてまつるに、つれづれと、いと物がなしくておはしましければ、やや久しくさぶらひて、いにしへのことなど、思ひ出で聞こえけり。さてもさぶらひてしがなと思へど、おほやけごとどもありければ、えさぶらはで、夕暮れに、帰るとて、

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏み分けて君を見むとは

(八十三段)

とてなむ、泣く泣く来にける。交野での桜狩りを楽しんだ八十二段に続き、八十三段でも親王と主人公の親しい交流が語られる。ここで男は「馬の頭なる翁」と称される。「狩」との関連で、このように呼ばれるのだろう。早く退出しようとする翁を、親王は執拗に引き留め、夜を明かすことになった。「時は、三月のつごもり」、まさに彼らの輝かしい青春の日々は過ぎ去りつつあった。やがて、予想外にも——親王は

早くから意を決していたのだろうが——親王は出家して、小野へ籠もる。「おほやけごと」の最も繁多な正月に大雪を踏み分けて参上するところに、男の変わらぬ忠誠心がうかがえる。

これに続く八十四段は、いったん話題を転じ、長岡に住む母皇女と主人公の、悲話を語る。死を予感する老母と、それを否定し、長寿を祈る子の哀切な贈答である。親王は出家し、母には死が迫っている。愛する人々と離れ、この世に取り残される主人公の孤独が浮き彫りになる構成である。物語の流れを断ち切るように、ここでも周到な章段の配列がなされている。八十五段を取り上げよう。

昔、男ありけり。童より仕うまつりける君、御ぐし下ろしたまうてけり。正月には、必ずまうでけり。おほやけの宮仕へしければ、常にはえまうでず。されど、もとの心失なはずまうでけるになむありける。昔仕うまつりし人、俗なる、禅師なる、あまた参り集まりて、正月なれば、ことだつとて、大御酒たまひけり。雪こぼすがごと降りて、ひねもすにやまず。皆人酔ひて、「雪に降りこめられたり」といふを題にて、歌ありけり。

思へども身をし分けねば目離れせぬ雪の積もるぞわが心なる

と詠めりければ、親王、いといたうあはれがりたまうて、御衣脱ぎてたまへりけり。

(八十五段)

主人公は「男」と呼ばれるのみであるが、八十三段を承けて「翁」と設定されていると考えてよいだろう。実際には業平より十九歳年少の親王を「童より仕うまつりける君」とする設定には、長年の二人の交流を強調し、親王に「翁」よりもさらに年長の風格を与える意図があるろう。同じく小野での新春の拝賀を話題とする八十三段とは異なり、本段には明るい雰囲気を感じられる。「俗なる、禪師なる、あまた参り集まりて」とあるのは、かつて交野で「上中下、皆、歌詠みけり」（八十二段）とあったのを思い起こさせる。主人公だけでなく、多くの人々から慕われる親王の手柄が偲ばれる。出家後もなお親王を取り巻く人々の風流は失われていない。八十三段で小野への道を厳しく拒んだ凍てつく雪は、本段では人々を温かく包み込むものとして対照的に描かれている。「尺に盈つれば即ち瑞を豊年に呈す」（謝惠連・雪賦・文選・卷十三）や「新しき年の初春の今日降る雪のいやしけ吉事」（万葉集・卷二十・四五・大伴家持）の例に見るように、年の初めの大雪は、豊年の瑞祥である。親王のもとに集う失意の人々は、ささやかな幸福の予感を抱きつつ、新春の寿ぎの歌を詠ずる。ここでも親王を感動させ、一座の中心となるのは、主人公「翁」の賀歌であった。「思へども」の歌は、宮様のことを深くお慕い申し上げますが、身を分けることが出来ないで、今年も忘れずに訪れてくれた雪が積もって帰れなくなつたのは、わが思いが天に通じたのです、といった意である。この

伊勢物語の「翁」と「みやび」（大井田）

場は幸福な雰囲気包まれているが、とはいえ、その喜びは束の間のもに過ぎない。人々は、孤独な主君を残し、後ろ髪を引かれる思いで味気ない日常生活へと戻ってゆかざるを得ないのである。

五

『伊勢物語』の「翁」を考えるにあたって、業平の兄行平の存在も軽視できない。業平とは異なり、硬骨の政治家肌であった行平は、藤原氏としばしば対立したらしい。『古今集』雑下「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶとこたへよ」（九六二）の詞書に「田村の御時に、事にあたりて津の国の須磨といふ所に籠もりはべりけるに、宮のうちにはべりける人につかはしける」とあるように、政治的な理由で、須磨に蟄居していた不遇の時期がある。宮仕えを厭う衛府の官人たちと布引の滝の追遙を楽しんだ八十七段も、この頃の出来事を背景としていよう。常行・融・惟喬親王らと同じく、行平もまた良房・基経に対立し、排除された一人であった。

七十九段は、行平の娘で清和天皇の更衣、文子が皇子を産出した、その産養を語っている。繁栄を誇る藤氏の下風に甘んじてきた、名門の在原氏にとって、待望の慶事である。ここで主人公は「翁」と呼ばれ、慶祝の歌を詠む。

昔、氏の中に、親王生まれたまへりけり。御産屋に、人々歌詠みけり。御祖父がたなりける翁の詠める、

わが門に千尋あるかげを植ゑつれば夏冬誰か隠れざるべき

これは貞数の親王、時の人、中將の子となむ言ひける。兄の中納言行平の娘の腹なり。(七十九段)

「わが門に」の表現には、名門ならではの矜持が感じられよう。「千尋あるかげ」は、竹が繁茂して大きな蔭をなすことをいう。梁の孝帝が竹を愛好して植えた故事により、若い皇族を竹に喩えるようになった。この皇子がやがて成長し、一門がその恩恵に浴して繁栄することを祈る歌である。なお、「千尋あるかげ」の「かげ」を「たけ」とする本も少なくないが、やはり「たけ」とすべきであろう。率直に「たけ」と言わずに「かげ」とした所に、一ひねりした機知が認められるのである。

「これは」以下、語り手のやや下品な評言が見えるが、王権をも侵犯しかねない、一筋縄ではゆかぬ翁のしたたかさが躍如としていよう。

権勢を独占し、他氏や他家を圧倒し続けてきた良房・基経に対する男の態度はいかなるものであったか。九十八段では、「おほきおとど」良房に「梅の造り枝に雉をつけてたてまつ」ったという、あからさまな追従のさまが語られている。その直前の九十七段を取り上げよう。基経の四十賀で、「翁」は賀歌を献ずる。

昔、堀河のおほいまうちぎみと申す、いまそがりけり。四十の賀、九条の家にてせられける日、中將なりける翁、

桜花散り交ひ曇れ老いらくの来むといふなる道まがふがに (九十七段)

「桜花」の歌は、「老いらくの来むと知りせば門さしてなしと答へてあはざらましを」(古今集・雑上・八九五・詠み人知らず)を本歌とする。ちなみに八九三から八九五の三首は、左注に「この三つの歌は、昔ありける三人の翁の詠めるとなむ」とある。

「散り」「曇れ」という慶祝の場にそぐわない、不吉な言葉を重ねた、翁の歌は、場の人々の度肝を抜いたはずである。不穏な響きをもつて歌い起こされるものの、最後には、老いを退けることで基経の長寿を祈る、祝意を込めて歌い収められる。とはいえ、やはり釈然としないものが残る。翁ならではの、歌の力によって、権門を挑発し、揺さ振りをかける「みやび」が見事に示された段といえよう。これとよく似たのが百一段である。藤原良近を招いた行平邸の藤花の宴で、男が「咲く花の下に隠るる人多みありしにまさる花の蔭かも」と詠み、藤氏に阿る人々をあてこすった。不審がる人々に、男は「おほきおとどの栄華のさかりにみますかりて、藤氏のことにも栄ゆるを思ひて詠める」と言っていた。

「桜花」の歌は、『古今集』賀にも収められている。作者が定家本のみ業平とし、他の諸本は行平としている点は重要である。

本来は行平の実作であつたものが、物語に取り込まれ、業平作と見なされ、定家本『古今集』の作者表記となつたのだろう。藤原氏に対抗心を燃やす豪毅な行平に、いかにもふさわしい歌である。行平の歌を、主人公のものとして転用して成立した段がもう一つある。百十四段である。

昔、仁和の帝、芹河に行幸したまひける時、今はさること似げなく思ひけれど、もつぎにけることなれば、大鷹の鷹飼にてさぶらはせたまひける。摺り狩衣の袂に、書きつけける、

翁さび人などがめそ狩衣今日ばかりとぞたづも鳴くなる
おほやけの御けしき悪しかりけり。おのが齢を思ひけれど、
若からぬ人は聞き負ひけりとや。 (百十四段)

仁和の帝、すなわち光孝天皇の芹河行幸に、男は、老人には不似合いと思いつつも鷹飼として供奉した。「翁さび」の歌は、じじむさいこの翁が狩衣を着ていても、皆様、咎めないでください、狩りをするのも今日限りと鶴も鳴いております、の意。帝は自身の高齢を揶揄されたように思い、すこぶる不興であつたという。

芹河行幸は、仁和二年（八八六）十二月十四日、業平が没して六年後の出来事である。この段は、『後撰集』雑一卷頭（一〇七五・一〇七六）の行平の歌をもとに物語化したものである。

仁和の帝嵯峨の御時の例にて芹河に行幸したまひける日
在原行平朝臣

伊勢物語の「翁」と「みやび」（大井田）

嵯峨の山みゆき絶えにし芹河の千代の古道あとはありけり
同じ日、鷹飼ひにて、狩衣の袂に鶴のかたを縫ひて、書きつけたりける

翁さび人などがめそ狩り衣今日ばかりとぞたづも鳴くなる
行幸のまたの日なむ致仕の表たてまつりける

「翁さび」の歌が、『後撰集』と『伊勢物語』ではまったく異なつた文脈に置かれている。『後撰集』では、自らの老いの自覚と致仕の決意を詠んだとするが、物語では、自身の老いを卑下するように見せかけ、老齡の帝を揶揄、嘲弄した歌と解釈されている。陽成の退位後、融らを制して基経が擁立したのが、この仁和の帝、光孝天皇であつた。やはり本段でも、権威や体制を挑発する歌の威力が語られている。もちろん、男が自身の老いを強く意識しているのもまた事実である。「摺り狩衣の袂に、書きつけける」とは、まさに初段の「狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる」という記憶を蘇らせる。春日の里で女はらからに歌を贈つた、あの元服したばかりの青年は、いまや人生の黄昏時にたたずんでいゝのだつた。

むすび

『伊勢物語』の主人公は、しばしば年老いた「翁」に扮装し、慶祝の場、風流の場に登場する。老残の姿をさらしつつも、巧み

な歌によって場を寿ぐ役割を演ずることになる。良房・基経一門により排除された悲運の人々のもとに親しく出入りしては、その風流をいっそう盛り立て、連帯感を強めてゆく。一方で、その歌の威力は権力の中枢に向かつては、鋭い牙を剥くことにもなる。摂関家や帝に接近しては、挑発、嘲弄の歌を詠み掛け、晴れの場を興醒めさせ、その権威を動揺させてゆく。老耄さを逆手に取り、大胆不敵な詠みぶりで人々の度肝を抜く。人生の様々な経験を積み重ねてきた翁ならではの老獪さ、したたかさがうかがえる。歌の力を武器として、翁たる主人公は「みやび」を發揮してゆくのであった。

注

- (1) 片桐洋一『鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語』(一九七五年、角川書店)、神尾暢子『伊勢物語の老翁表現』(『学大国文』一九八三年二月)、花井滋春『伊勢物語の翁とその語り』(『むらさき』一九八五年七月)、田中徳定『伊勢物語翁登場章段についての一考察』(『駒沢国文』一九八七年二月)、宮谷聡美『『伊勢物語』の翁』(『東京経営短期大学紀要』二〇一一年三月) など参照。
- (2) 注(1)の神尾論文、田中論文参照。
- (3) 『作庭記』の引用は、林家辰三郎校注『日本思想大系 古代中世芸術論』(一九七三年、岩波書店)により、適宜表記を改めた。
- (4) 源融と河原院については、山中裕『平安人物志』(一九七四年、東京大学出版会)、ベルナル・フランク、仏蘭久淳子訳『風流と鬼』(一九九八年、平凡社) など参照。

- (5) 『文華秀麗集』の引用は、小島憲之校注『日本古典文学大系 懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹』(一九六四年、岩波書店)による。
- (6) 渡辺実『源融と伊勢物語』(『国語と国文学』一九七二年十一月)、同『新潮日本古典集成 伊勢物語』(一九七六年、新潮社) 解説。
- (7) 惟喬親王章段については、拙稿『伊勢物語・惟喬親王章段の主題と方法』(『国語と国文学』二〇〇八年九月) 参照。
- (8) 行平関連章段については、拙稿『流離とみやび―津の国の行平・業平兄弟―』(『名古屋大学文学部研究論集 文学』二〇一七年三月) 参照。
- * 『伊勢物語』の本文引用は、大井田晴彦『伊勢物語 現代語訳・索引付』(二〇一九年、三弥井書店)による。
- キーワード：伊勢物語、翁、みやび

Abstract

The Okina and miyabi of Isemonogatari

Haruhiko Oida

From the coming-of-age ceremony of the main character to his death, Isemonogatari depicts various events in his life. Many chapters talk about his later years. He was often called the “Okina” and attended prominent banquets. He celebrated the banquet hall with his skillful waka.

The Okina visited Fujiwara no Tsuneyuki and Minamoto no Toru’s luxurious palaces and dedicated a celebration waka. Unfortunately, they were both excluded from politics. He often visited their palace, increasing their Miyabi and strengthening their solidarity. On the other hand, he also approached powerful people such as the emperor and ministers. He undermined their dignity with provocative waka. His fearless waka surprised and upset the participants. The presence of his brother, Yukihiro, is also important. By the power of the waka, he showed off his Miyabi.

Keywords: Isemonogatari, okina, miyabi